やかただより

広　川　町
全 戸 配 布

第１０９号
令和元年１１月

１１月５日は世界津波の日

２０１５年１２月に第７０回国連総会で制定された「世界津波の日」は今年で第４回目になります。この「やかただより」が皆様のお手元に届くころは、今年の「世界津波の日」は終わっているかもしれません。特筆すべきニュースは次号でお伝えいたします。

「ＪＲの避難訓練」「国連ユニタールの世界の女性リーダーの防災研修」は今年も行われます。

「ＮＨＫの防災特別番組」は今年は当館からの放送はありませんが、１１月５日夜１０時からラジオ第１放送の「ＮＨＫジャーナル」で、広川町の防災の取り組みが取り上げられることになっています。１１月１日には、例年どおり「濱口梧陵国際賞」の受賞者が来館されます。１１月２日には、和歌山下津港西浜地区で国土交通省や和歌山県等が主催する「２０１９大規模津波防災総合訓練」に、「稲むらの火の館」が参加することになりました。防災展示エリアで当館の写真パネルを展示させていただきます。

１月１７日は阪神淡路大震災、３月１１日は東日本大震災、９月１日は防災の日。そして、１１月５日の「世界津波の日」「津波防災の日」と、年間通して防災啓発の日がありますが、「稲むらの火」の１１月５日の周辺では、世界中で津波防災の訓練や講演会、シンポジウム等が開催され、防災への気持ちを新たにするもので、これらの経過は、来月号で報告いたします。

「濱口梧陵すごろく」を配布

広川町では「濱口梧陵すごろく」を作成しました。町内小中学校やイベントの時に配布するということです。

梧陵さんの誕生の時にスタートしていろいろの活動や社会貢献を年代を追って進んでいきます。輝かしい功績の時には、いくつか進んだり、苦しかった時や失敗の時には休んだり戻ったりします。長年の悲願だった欧米視察に旅立ったところで「あがり」です。

このすごろくは、台紙と、「広村堤防」や「稲むらの火」を組み立てるクラフトペーパーとのセットになっています。台紙を持って「稲むらの火の館」を訪れるとクラフトペーパーが無料で受け取れることになっています。

また、台紙の裏面には「梧陵年譜」が印刷されていますので、梧陵さんの幅広い活躍を知ることができるようになっています。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

古民家体験イベント

「HIROGAWA Re:branding Project 実行委員会」では、昨年度に続き「古民家体験 in 広川町」が実施されます。今年は「戸田家」「東濱口家」「耐久社」を拠点として開催されます。もちろん「稲むらの火の館」も含まれ、「食」「体験」「まちあるき」の３分野でそれぞれ体験していただきます。１１月１６、１７日の両日です。各種体験の後、１６日夕方からは「耐久社」で「耐久高校マンドリン部」と「さつきのあき氏」の生演奏もあります。楽しいイベントですので、詳しいお知らせを待ってご参加ください。

関西龍谷 News

こども梧陵ガイドの準備をおこないました！

こんにちは！「こども梧陵プロジェクトチーム」の関西大学近藤ゼミ、龍谷大学石原ゼミです！私たちは 10 月 7 日に稲むら火の館と広小学校を訪れ、6 年生と共にこども梧陵ガイドの準備活動をおこないました。こども梧陵ガイドとは、稲むら火の館の 1 階と 2 階で、小学生が来館者をガイドする取り組みで、今年は 11 月 16、17 日に実施します。今回は、展示物を見ながら、ガイドする際に児童が来館者に出題するクイズを考えました。最初はなかなか苦戦している様子でしたが

どの児童も真剣に取り組み、最終的にはたくさんのクイズ案を出すことが出来ました。昨年までのクイズにはないユニークなクイズが数多く仕上がりましたので、きっと来館者の皆さんに楽しんで頂けることでしょう。いまから楽しみです！

交通安全教室にも参加しました！

午後の交通安全教室にも参加しました。最初に校長先生から、「今日は命を守るための勉強だと思って真剣に取り組むように」とのお話があり、自分の命は自分で守る点においては交通事故も災害も同じだと感じました。和歌山県警察の方による交通マナー講座を聴き、そのあと児童たちは実際に自転車に乗って、踏み切りで止まることや後方確認をしっかりすることなど、交通安全の基礎を学びました。

『安政聞録』翻訳文　（その９）

原作・古田　詠処　　養源寺蔵

蔵は二戸流失、高札場も流失、ただし高札を取り集めて村方の帳面に記したので不足はなく、別状はなかった。

波がたまっていたのは、中道筋は一本松の二枚下の田までで、西は山本下出まで、川筋は馬が出入りする馬場下まで、湊は烏の森の表筋まで、広川筋は名島堀川波の湯屋(銭湯?)、ここまでに伝馬船にて船を寄せて、大納屋新田前に五、六十石船が二艘あった。これは備前蜜柑船であり、二艘とも少し破損していたが、別段の破損はなく、別所の田に船や家の破損した古木やその他道具類が山のように流れ着いていた。

むかしにおこった宝永四年の津波はゆっくりと来たので、走り逃げることが波をかぶっても事なきを得たが、最初の津波が去り、大きな二番波が来て多数の人家を失ったのであった。三番目の波で終了した津波は、一本松までいった。無事を人々ごとに記録などをして、あるいは聞き伝えて、みな津波の心得があったのだが、このたびは元にもどったため、多数の人を失った。それでも津波は久しぶりであったため、大いに逃れやすかった。もし宝永の時のように、二番波がたえれば、はなはだ人を様すべかりし、昔の文明乙未の年（１４７５）の津波は、井関の三舟谷まであがったと言われている。三舟谷というのは、この時三艘の舟が流れ着いたので、それから人々がそのように名づけた。また八幡の石段が三川を流した。また天正の頃にあった津波は、安楽寺が潰れたということで、宝永の津波の時は、人々が安楽寺を建立して、３、４年なりしをたしかに思逆入、二番波が高かったので堂や鐘楼も倒され、多くの人を失ったと記録にある。そして今回は、堂頭がのこった。この理由は一つには津波の大小によるものと思われるが、また八つ時ころに変化があり、決め付ける訳にはいかない。後世の人はこれを弁ずる時は、逃げ込んだ所などをよく心得ておくべきことだ。もっとも臨機応変を重要とすべきであるが。地震が起こった時に心得ておくべきこととして、広いところへ出るべきである。　　（つづく）